

## 日有研の有機農業運動への貢献

# IFOAM 50周年記念式典で表彰されました



アイフォーム オーガニックス インターナショナル (国際有機農業運動連盟) は今年で創立 50 年を迎え、10 月 1 日～3 日、韓国中央部の槐山郡(クェサン-gun)で 50 周年記念式典を開催しました。その際、日有研の長年の貢献を認め式典で表彰するとの連絡を受け、当会を代表して魚住道郎理事長がビデオメッセージで参加しました。(写真)

魚住さんはビデオメッセージで、有機農業運動における日有研の最大の貢献は、「提携」という、生産者と消費者の連帯を基調とするパートナーシップを生み出したことだと述べ、また今後の IFOAM の活動として、小規模な有機農業を支援し、「提携」や類似モデルである C S A (地域支援型農業) などの普及を進めることを呼びかけました。

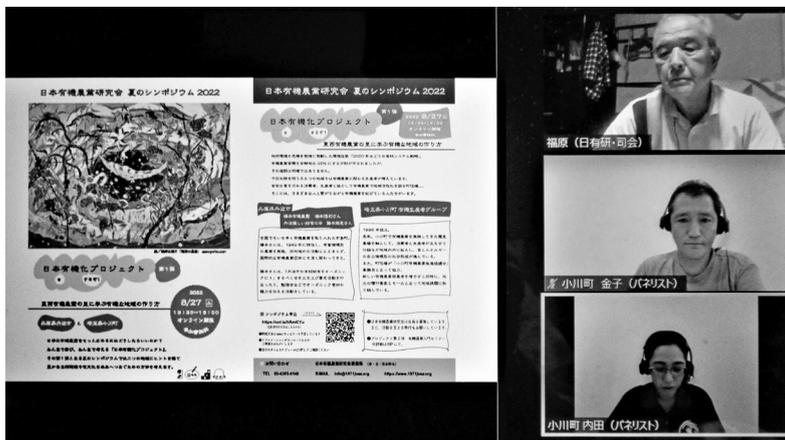
IFOAM 50 周年という記念すべき年に日有研が表彰されたのは、創立者である一楽照雄さんが若月俊一さんらと共に 1974 年にパリで開催された IFOAM の大会に出席にしたことに始まり、82 年には大平博四さんと築地文太郎さんがボストン大会で「提携」を紹介、86 年のカリフォルニア大会では「提携 10 原則 (提携 10 か条)」を一楽さんと天野慶之さんが紹介し、大平農園を描いた映画『みんな生きなければならない』の上映、『わら一本の革命』で人気を博した福岡正信さんの講演もありました。93 年にはアジアで初めて IFOAM アジア地域会議を他団体とともに日本で開催した実績も挙げられます。2011 年に韓国で行われた大会では魚住道郎さん、林重孝さん、久保田裕子さん、本城昇さん、若島礼子さん、田坂興亜さん、吉野馨子さんが発表し、「提携」の分科会を開くなど健闘しました。

村山勝茂さん、橋本慎司さん、澤登早苗さん、久保田さんなど歴代の国際部のみなさんの尽力、海外から日本を訪れた有機農業関係者の見学や研修を快く引き受けていただいた会員のみなさんの協力も忘れてはなりません。そして何より日本の有機農業を牽引し、世界がその意義を認める「提携」をつくりあげ実践してきた、会員の総力が実を結んだ結果です。表彰を共に祝いましょう!

国際部 近藤和美

## 日本有機化プロジェクト 第1弾

# 東西「有機農業の里」に学ぶ 埼玉県小川町／兵庫県丹波市 有機な地域の作り方



内田真理子さん

現在、小川町では「おがわんプロジェクト」を進めており、慣行農家も含めて農家を応援する「おがわん認証」という取り組みをしています。今後も生産・流通・消費をパッケージ

有機食材が提供されています。

8月27日、オンラインによる夏のシンポジウムを開催しました。みどりの食料システム戦略で、有機農業面積を全耕地の25%にする方針が示されましたが、その道筋は明確ではありません。そこで、有機農業の盛んな2つの地域の取り組みについてお話をうかがうことにしました。

司会は江原浩昭理事(埼玉県)と福原庄史幹事(島根県)が担当。

### 50年前「点」だった有機農業を「面」に

埼玉県小川町からは行政と生産者、そして両者をつなぐ役割を担っている方からの報告です。トップバッターは小川町役場の内田真理子さんです。

小川町は農地が14・3%、林地が54・3%を占める中山間地で、経営面積が1ha未満の農家が全体の3分の2を占めています。過去20年で新規就農者が39名、そのうちの33名が有機農業をしています。農を中心とした自然循環型生活様式に憧れ、移住者も増加しています。農家にならない人もおられますが、有機農業とかかわりを持っています。小川町の有機農業は1971年に金子美登さん(霜里農場)／2022年9月24日逝去)が始めたのが原点です。その後、1995年には生産グループが作られ、2016年には学校給食に



金子宗郎さん

ジにした有機農業推進の取り組みを町として応援していくことを話されました。続いて霜里農場の金子宗郎さん（小川町有機農業生産グループ代表）から地域と共に歩むというテーマでの報告です。

まず有機の意味をorganicという言葉

を使って解説しました。Origin＝根源・原点、Organize＝調和・協調という意味があり、Organize＝Harmony\*、自然環境や地域資源、社会経済や販売加工など自給の輪が広がっていくのが有機農業の意味であり、魅力であると言います。

少量多品目、季節栽培、米や麦、大豆も手がける「農業はアートであり、畑は大地のキャンバス」という金子美登さんの言葉が有機農業を象徴しています。地域の酒蔵、豆腐工房など地域が有機農業を支え、また有機農業が地域を支えています。

有機農業生産グループの農家は、経営確立型やライフスタイル重視型など多様な形態ですが、お互いがゆるい連合体になっており、慣行農家を含めて排除や対立ではなく、多様性・共生に基づいたものになっているのが特徴です。

最後は小川町魅力発信拠点「むすびめ」で移住サポートを含め、地域コーディネーターとして活躍されている八田さと子さんの報告です。



八田さと子さん

有機農家による有機農業入門講座など有機農業の普及を「紡ぐ」と位置づけ、「むすびめ」などでの有機農産物の販売、レストランなどの展開や有機農業をテーマにした取り組みを「織る」とし

ています。そして有機農業を中心にさまざまな農家・行政・企業・生活者が「地域を包む」ことで移住する人たちが増えている状況が生まれています。

50年前、点であった有機農業がつながり、線となり、それが面となって地域が優しく包まれているのが小川町です。

※傍線部 イオンアグリ創造株式会社 南登幸信さんの脚注

（文責 江原浩昭）

### 「丹波市有機の里づくり推進協議会」で連携



「有機の里いちじま」の看板が立つ

シンポジウム後半は兵庫県丹波市からの報告で、市島町で有畜循環型有機農業を営む橋本有機農園の橋本慎司さん（本会幹事）と、「丹波やさしい給食の会」代表の藤本理恵さんのお二人からお話をうかがいました。

市島町で有機農業が広まるきっかけとなったのは、1970年代初頭から食品添加物や農薬の問題を訴えてきた保田茂さん（NPO法人兵庫農漁村社会研究所理事長／神戸大学名誉教授／本会顧問）と市島出身の近藤止さん（故人／元全国愛農会理事長）が中心となって、生産者と消費者のグループ「市島町有機農業研究会」を作ったことです。消費者側は「食品公害を追放し安全な食べ物を求める会」を設立し、年2回の作付け会議で作付け面積や作付け品目、農産物価格な



大豆トラストの畑で



橋本慎司さん

ど、双方が納得する形で決めていくという運営をしてきました。もともと生協の仕事をしてきた橋本さんが、出身地ではない市島で有機農家になったのも、そういう提携のあり方に惹かれたからだとか。

「市島町有機農業研究会」は、松くい虫空中防除反対運動など地域の環境を守る行動もやってきました。ゴルフ場建設反対のための立木トラストは大豆トラストへとつながり、現在も続いています。こうした運動が可能になったのも、生産者組織とそれをバックアップする消費者グループがあり、それぞれが手分けしてできることをやれたからだと言橋本さんは言います。

行政やJAとの連携も積極的に行われ、設立された「丹波市有機の里づくり推進協議会」では、土壌分析研修など技術を高める取り組みを行い、成果を上げてきましたが、2019年4月からは専業の有機農家を育てるため「丹波市立農みのりの学校」も開校し、毎年20名が学んでいるということです。

丹波市出身の藤本理恵さんは、10年前にUターンして夫婦でカフェを経営し、無農薬で自ら育てた小麦や野菜を使った焼き菓子を作っています。息子さんの誕生をきっかけに食の安全に対する意識



藤本理恵さん

が高まり、給食について調べる中で同じ思いのお母さん仲間とつながり、「丹波やさしい給食の会」を立ち上げました。丹波市は「有機の里」を掲げているものの、有機農業のことをまったく知らないお母さんたちもいるので、知識の底上げをするため、SNSでの食に関する情報発信、ワークショップや勉強会、有機野菜のおいしさを伝えていく活動などをしています。

去年6月から11月には給食の有機化にむけた署名活動を行い、集まった4629筆を市長に要望書と共に提出。12月の丹波市議会に提出した請願書には、

1. 学校給食運営基本計画において、有機産物の利用促進について明記し、オーガニック給食の実現に向けて取り組みを進める
2. オーガニック給食の実現に向けて、生産者を含む多角的な仕組みづくりを協議する場を月1回など定期的に設ける
3. 回数や品目を絞るなど、できることから実現し拡充をはかる

という3点について要望が記され、全会一致で採択されました。採択に至るまでに、市長や市議会議員との面談を重ね、市議会議員さんとお母さんたちでピクニックをするイベントを開催するなどして、活動や思いを知ってもらおう機会を設けたそうです。会のFBページには、署名用紙の内容や請願書の内容も載っているのでご参照ください。

藤本さんの報告を受けて、橋本さんからは、学校給食を地域でや

りたいという声だけではなかなか進まないけれど、横のつながりを作る、議員と話するなど、具体的な行動を起こすことが重要だということ、また、特に田舎では議員が身近にいるのがメリットなので、それを生かして直接地方行政に関われる可能性があることが指摘されました。

個人でやれることには限りがあるけれど、生産者、消費者が手を取り合い、行政にも積極的に働きかけていくことで、少しずつより良い方向に変わっていくのだと実感しました。

(文責 毛利公美)

## 質疑・応答

内田さん(小川町)へ 有機農家の出荷量は、流通の中でどのくらいの割合ですか。また、販売コーナーでの陳列状況、補助事業について教えてください。

内田 平成2年の農林業センサスの小川町農業産出額10億2000万円から単純にみれば19%ぐらいです。「おがわん野菜」は販売の際には4段階の認証レベルごとに陳列され、機械と施設については100万円を上限にかかった費用の2分の1の補助があります。土壌検査は自己負担が1万円程度になるように補助しています。

金子さん(小川町)へ 多品目少量栽培についてのお考えをお願いします。

金子 小川町は若い就農者の土づくりを大切にしています。多品目の自給的農業が基本です。埼玉県は、県南は野菜の産地ですが、小川町は県北にあり、野菜の産地ではありません。だから条件を

逆手にとって有機農業なのです。

藤本さん(丹波市)へ 「全国無農薬給食の会」との連携は？

藤本 「全国無農薬給食の会」丹波支部で今から6、7年前にオーガニック給食を実現させたお母さんたちからアドバイスを受けながら活動していますが、丹波支部はお母さんたちが忙しくなってしまうため、今は活動を休止しています。

橋本さん(丹波市)へ 今は米や野菜の学校給食への供給はないのですか？

橋本 旧市島町では、かつては学校に有機野菜や地元の野菜を供給し、米飯給食100%も実現していましたが、現在は、給食の提供が市の基準で実施されているため、パンも出すなど状況が変わっています。今後は、コメを中心に取り組むことにしています。

橋本さん(丹波市)へ 丹波市立農の学校の運営が(株)マイファームに委託された経緯と、堆肥センターの改善について教えてください。

橋本 旧市島町は産消提携で新規就農者が増えています。新規就農者の自立のために有機JAS取得による市場出荷や量販店にも出荷が始まりました。新規就農者が増えるにつれて市が莫大な予算を投じてカリキュラム編成をし、公募しました。ただ、卒業生の実態をみて、以前のように経験者について学ぶやり方の重要性も指摘されています。

堆肥センターの改善については、スクリー方式にして堆肥の中にエアーを送りながら、全体をスクリーで回して均一な堆肥をつくることで高品質堆肥をめざしています。

福原 今日とは有意義なお話をありがとうございました。

(文責 福原庄史)